《CEL SERIES》

# 大阪再発見 Vol.2

written by Tomoyo Kurimoto 栗本 智代

▲細野ビルでの「六六展」より
◀自動車倉庫兼工場がインテリアセレクトショップ「pour annick」に

## 第10回 西船場

## 上質な時間を享受できる“ 隠れ家 ”としての魅力

西船場というエリア（西横堀以西、北は土佐堀川、南は長堀、西は木津川に囲まれた地域）は、大阪の中でももっとも「水の都」「堀割のまち」と呼ぶにふさわしいところであった。西横堀が慶長初年に開削されて以降、次々に東西に堀割ができた。北から、江戸堀、京町堀、阿波堀、立売堀、そのほか海部堀、薩摩堀もあり、船問屋や魚・塩干魚市などで賑わった。また、徳川幕府の頃、新町は、京の島原、江戸の吉原とならぶ遊郭として栄えた。しかし現在、堀割はほとんど埋められ、盛り場的な雰囲気もほとんど残っておらず、町の名前だけに留まっている。

今、四つ橋筋や土佐堀通りなど幹線道路こそ交通量が多いが、そこから一本入ると、小規模な商店やオフィス、住宅などが混在しており、昔ながらの落ち着いたまちとしての空気感を留めている。戦災から難を逃れた近代建築も数多く残っているが、比較的規模が小さく、その意匠の個性からいってもあまり目立たないものが多かった。しかしそれぞれの味わいを大切に維持しつつ、さらに新しい機能や要素をつけ加えた改装を行うことで、開かれた魅力的な場になっている事例もあり、それぞれの個性が光っている。

一方で、工場や倉庫などを改装し、ライフスタイル提案型の家具やファブリックの店舗に変身させ、地域の魅力向上につなげるというチャレンジもある。靭公園の周辺にポツリポツリと増えてきたカフェやショップも含めて、居心地の良い隠れ家的な「場」が展開され、より魅力的な住空間が創造されつつある。

江戸堀コダマビル 外観

# 近代建築の再活性化

## SCOO（ダコタハウス）

土佐堀通りに面した、四階建てのこのビルには、歴史を刻んできた建物だけがもつ独特のぬくもりがある。特に意匠に凝っているわけではないが、上部がアーチ状になった縦長の窓や階段室の踊り場に特徴がある。大正末期から昭和初期の竣工で、設計・施工者は分かっていない。

このビルが一九九九年にリニューアルされ、一階がカフェ、二階以上は美容関連のフリーアーティストたちの活動サロンになった。もともとオーナーは、このビルをつぶして建て替える計画であったが、不動産コンサルティングを担当した（株）アイディーユー（以下、IDU）が調査の結果、「価値ある近代建築の一つで、壊してはいけない」とアドバイスし、逆に六年間の定期借家として一棟借りすることになり、新たな活用方法を生み出した。IDUの担当者は「人が使って利益もあがってこそ、不動産の価値が上がる」という考え方のもと、いろいろな方が中に入って見ていただけるような機会をつくることにした。たまたま、マスコミ関係の撮影のヘアメイクを担当されている知人が、ふだん活動するための美容スペースを希望していたことをヒントに、パーマやカラーリング、ネイリング、アロマエステ・マッサージなど、フリーのアーティストとそのお客様に使用してもらうサロンが創られた。お客様はアーティストを指名することもできるし、次々に変えて変化を楽しむこともできる。アーティストは約四十名、お客様は主に二十五歳～四十歳。受付業務は、IDUが担当している。

改装の際、建物本来の質感を保つことと、空間をシンプルにするため、あまりものを入れないことにこだわった。あくまでフリーアーティストの個性を尊重するためである。窓枠は鉄のままで、冬はすきま風も冷たく、また水道管が細いために上階は水の出が悪いなど不便なところはあるが、最小限の工夫で抑えてある。逆に照明は、蛍光灯を避けオレンジ系のあたたかいものでほぼ統一。特に夜になると、建物内のぬくもりが、照明を通して道路に洩れて、遠くからでも目をとめる人が多い。

一階のカフェは、当初IDUで運営していたが、二〇〇二年秋から、新たな店子として、カフェ「DAKOTA TAVERN」がオープン。グラフィックデザイナーのさとうこういち氏の手描きの壁画や市松模様の床、フィリップ・スタルクの椅子など、ニューヨークをイメージしたスタイリッシュな空間として、ビルの顔になった。

SCOO 外観

SCOO 2F受付／待ち合わせ兼くつろぎスペース

SCOO 1F／カフェ DAKOTA TAVERN

※ニューヨークでジョンレノンが住んでいて撃たれた「ダコタハウス」というビルの名前は、IDUが改装の際に名付けたものだが、一階のカフェの店名の"DAKOTA"は、ビル名を全く知らずに店長が決めたもので、後で偶然の一致に驚いたというエピソードがある。

## 江戸堀コダマビル

江戸堀に建つ、地上三階地下一階のこの小さなビルは、洋館の趣をもち、しかも和風のディティルもある、独特の味わいを放っている。

昭和十年竣工、設計・施工は岡本工務店、近代建築史に大きな功績を残したヴォーリズ設計の建物を数多く施工した工務店であり、そのためヴォーリズの描く生活様式とミッション思想が、このビルのファサードに、ミッション・スタイル（スパニッシュ様式ともいわれる）として反映されている。

現オーナー児玉竹之助氏の祖父にあたる竹次郎氏の本宅として建設された。竹次郎氏は、岐阜から大阪へ丁稚奉公し、独立後にワイシャツ店を開業し綿布商も営まれていたが、開業から三十数年後、今の靱公園付近にあった店のほかに、住まいとしてこのビルを建てたという。竣工当時は、道路に面して門と高

塀が建ち、外から見た印象は、伝統的な町家とほとんど変わらなかったという。ただ当時、周辺は木造の平屋ばかりで、三越百貨店まで見渡せたそうだ。

戦災は免れたものの老朽化のため、昭和五十三年に改装し、自家用のほか、テナント貸室を設けた。和室もあるため、小人数のカルチャー教室や茶話会にも使われている。ユニークなのは、レッスンホール（室内楽練習室）である。竹之助氏は、大学時代オーケストラ部に所属されたことからクラリネットを演奏されるが、その時からの縁で、音楽の練習用に設営したもので、音響技術の専門家の指導と建築デザイナーの設計による本格的なホールになっている。非常に響きがよく、演奏者が気持ちよく練習できるよう工夫されており、有名なプロの演奏家（例えば、久石譲、フジ子・ヘミング、ベルリンフィルのメンバー他多数）の隠れ家的な練習場になっている。肥後橋にあるフェスティバルホールなど各ホールでの公演前のリハーサルにも活用されているようだ。「もともと地域の方に使っていただこうと思っていたのです。どうやって知られたのか分かりませんが、プロの方にもご利用いただく機会が増えました。一方で子供さんのピアノの発表会の場としても喜んでいただいています」。

江戸堀コダマビル／音楽ルーム

江戸堀コダマビル／建物入り口部分

児玉 竹之助 氏

竹之助氏は、一九八五年、八六年とヨーロッパ旅行をされてイタリアに魅せられてからというもの、イタリアの現代美術をコレクションしながら紹介していくための画廊をされていたこともある。イタリアに関する資料も数多くお持ちで、ビデオ・カタログ書籍・地図など「イタリア資料室」として一般に無料で公開されている。また、入り口横のルーフを、ミラノの建築家に依頼してつくらせ、また近くにあった日本火災ビルが取り壊される時、円柱の柱頭をひきとって置いているなど、竹之助氏自身のこだわりをさらに折衷させた様相が生まれている。

前庭に、日本火災ビルの柱頭部分を移設

しかし、基本的には、「竣工当初の雰囲気を大切に残し、記憶のある限り、復元していきたい」と言われる竹之助氏、手すりの飾りの修理やステンドグラスの再現など、計画をたてていらっしゃるようだ。さらに、三階の空室を利用して、蔵にしまいこんであった大正から昭和初期の店の道具、火鉢・コタツ・湯たんぽなど古い家庭用品を取り出してきて展示をしようと、密かに準備を進めているのだそうだ。古いものを大切にしながら、自分自身の嗜好に正直に融合させてしまう、その柔軟さと遊び心が、コダマビルの"内緒にしておきたい魅力"を生み出しているのだろう。

模型で竣工当時の姿を再現している

## 細野ビルヂング

新町四丁目、新なにわ筋と長堀通りが交差する角に、特に大きな看板もなく、静かにたたずむビルがある。中に入って驚かされるのは、事務所、会長室、階段など、あちこちに使われている上質の石材。受付カウンターも円柱の一部も高級な大理石である。

細野ビルは昭和十一年竣工、地上三階地下一階、設計・施工は細野組建築部で、その本社ビルとして使用されていた。細野組は、土木工事請負会社として、近代の都市開発に大きな足跡を残している。御堂筋の道路工事筆頭請負業者でもあり、大阪築港や芦屋の六麓荘の開発、芦屋高等女学校（現芦屋学園）の創立など、創始者である細野濱吉氏の功績は大きな評価を得ている。

現オーナー細野房雄氏（濱吉氏の孫にあたる）によると、このビルを取り壊して十四階建ての新ビルを

細野ビル 外観

細野ビル／上質の大理石が使用されている受付カウンター

細野 房雄 氏

建設する計画であった。が、改めてこの建物をみた房雄氏は、細かく計算された設計技術や上質の素材、センスのよさなど、驚くと同時にすっかり魅せられてしまった。濱吉氏ことの元会長の部屋（会長室）は、会長用のデスク、書棚、応接セットなど、家具も設計時から全てコーディネートされた見事な空間づくりがなされている。一階は、遠近法を駆使して微妙に柱の位置や長さが異なっており、また階段の手すり下部には大きな一枚の石材が使用されている。建物の傷みは不思議なほどほとんどなく、「こんな素晴らしい濱吉の足跡を、私の代でほったらかしにしていた、これは自分の恥だと反省しました」と、房雄氏はこのビルを残すことを決意。三年余り前から自らの手作業で壁の修復作業を開始されている。剥げかけた漆喰はあえてそのままにしており、それがまた建物の年輪を感じさせる。

テナント貸しを四十年ほど行ってきた細野ビルだが、昨年九月末に一階と地下を長年借りていたテナントが退出されて、広いフリースペースをもつことになった。「玄関から会長室までまっすぐ歩けた喜びといったら、夜も嬉しくて寝られませんでした」。これが新しい契機となり、今年の二月、たまたまこのビルが好きで、テナントとして部屋の空き状況を何度も聞きにきていた二十二歳のアーティストに、地下スペースをギャラリーとして提供することに。さらに五月にも同様に展示会が開催された。その後、テナントである会計事務所の関係で、一階で中国家具の展示会を行ったり、若者をターゲットにした「カジカジ」というファッション雑誌に掲載されたりと、広報活動を一切していないのに、訪れる人が増えてきたという。「フリースペース代は、ほとんど私の給料から引く形で、アーティストの方には、できるだけ安価でお貸ししています。ただ、ビルを気に入って訪ねてくれた人にしか貸しません」。週末、このビルをスケッチする人の姿も増えてきたという。

そして、六月六日、六時六分から「六六展」が開催された。細野組が総合開発した芦屋の「六麓荘」にもかけたネーミングである（昭和三年にできた細野組六麓荘事務所の修復が再来年には完成する計画だという）。細野ビルで個展を開きたいというアーティストたちが呼びかけ、その仲間が仲間を呼んで、六十六人のアーティストの競演（饗宴）が実現した。房雄氏は、「コーディネーターもなく、細野ビルとアーティストだけの関係です。アーティスト同士が出会って交流できる場にしたい、それだけを願ったので、参加アーティストによるダイレクトメール以外、マスコミなどには告知しませんでした。六六展で初めて出会った人同士が、またグループを組んで作品展をしよう、という話になればいいですね」。「細野ビルが生き生きと使われるにはどうすればいいかを考えると、三年間は自分で取捨選択せず、ここでやってみたいという意欲あふれる方に任せてみようと思っています」。

六六展の様子／大勢の若者が集まりライブを楽しんだ

フリースペースとなった一階の中で、会長室の一部屋だけは神聖な場所として使用を許可していない。特に濱吉の椅子については、どんな人にも座ることを禁じている。「濱吉は、ゼロからのスタートで積み上げて細野組をつくったのだから、アーティストにもいい存在だと思います。濱吉から見える場所での飲食は厳禁です。ばちが当たるから」と房雄氏。「人がたくさん来ると建物が傷むので、本当はよくないのですが、でも嬉しいものです。六六展の時も、作品は壁に

細野ビル／元会長室は今でも神聖な場だという

かけず床に置いてもらい、ライブペイントなどはお客様には床に座って鑑賞していただきました。偶然の出会いを大切に、ここから元気な文化発信をしていきたいです」。あくまで濱吉氏を尊重しながら、新しい場の生かし方を手探りで試みている房雄氏とビルの魅力で、新たな賑わいが創られている。

## オピューム（崎山ビル一階）

西本 順三 氏

朝本町一丁目、四つ橋筋から一筋東へ入ったところに、大正中期に設計施工された四階建ての崎山ビルがある。その一階にレストラン「オピューム OPIUM」が開店したのが、約二十年前である。店長の西本順三氏は、偶然不動産屋に紹介されてこのビルに出店を決めたと話す。「ここは、もともと信楽焼のショールームだったと聞きましたが、私が入る直前は居酒屋になっており、幽霊屋敷のようでもありました。しかし、改装する途中でガスを引くために壁を壊したところ、その奥からマーブル模様のタイルが少し顔を出し、思い切って全て（覆いであった）壁を取り壊すと、ほとんど傷みのない見事な腰壁が現れたのです。本当に驚きました。さらに天井の彫刻や円柱など、近代建築的な意匠があちこちに残されていて、これを生かした空間づくりをしようと思いました」。壁の漆喰が塗り替えられ、床も上だけWOODを貼り付けて、もとの雰囲気に近いものを目指したという。時計も、わざわざ昭和初期の手巻きのものを選び（大正期のものは入手できなかったそうだ）、時刻を鳴らす『ぼーんぼーん』という音を懐かしく楽しめる。新たに設けられた中二階のロフト席もお店の雰囲気とあわせ好評だという。

現在の照明は、テーブルを丸から四角に変更したのをきっかけに、三年前に店長自らデザインされた。「オピュームというのは、アヘンという意味。中毒になるほど通いたくなる店を目指しています」。

オピューム／店内

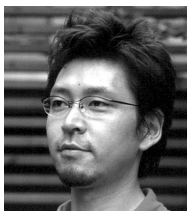
# 住民の視点からのまちづくり
## スローなまちを目指して
### ～大事なことは、大家さんから教わった～

## ライフスタイル不動産 賃貸業への転換

朝公園をはさんだ京町堀から新町界隈で、古くなった物件の有効利用によって、より魅力的な住空間づくりが試みられている。この取り組みを行っている（有）バックステージの河合義徳さんは、「この地域は、大きな公園があり、住宅と職場も並存しており、穏やかな空気感のあるまちです。また、お店の職員に対して“もっと丁寧に対応せなあかん”と厳しいことを言っているのかと思うと、行儀作法を教えてちゃんと何か買って帰る気概のある方も多いまちなのです。ただ、そうした魅力的なエリアでも、一時的な商売目当ての店ばかりが増えると、まちが乱れてしまう。それよりも、住民としてまちの中に何があれば嬉しいかという視点で、新しい場の活用方法を提案しています」。

最初の試みは、新町にある「スポーツカー関西」というクラシックカー修理販売業の倉庫兼工場に、インテリアセレクトショップ「pour annick」を誘致することであった。この工場について、後継者となる職人が減少していることやオフィス賃貸には難しいエリアであることなど、オーナーがその有効利用に頭を悩ませていたところ、河合さんが「ライフスタイル不動産賃貸業への転換」を起案され、また「pour annick」側も、「時間がかかっても落ち着いたまちがいい」と、不動産コスト・コンテンツ・空間などにバランス感のある新町が気に入られ、東京でも人気の高いインテリアショップの関西初出店が実現した。工場であったスケルトンをそのまま生かしたショールームが逆にお

pour annick（プールアニック）入り口／休日には、ここで家具のメンテナンスを行い、住民など通行人とのコミュニケーションの舞台にもなっている



河合 義徳 氏

洒落で、贅沢な前庭は、四つ橋筋からも目に留まるよう工夫されている。

商品だけでなくライフスタイルそのものも提案販売するこの店舗の出店によって、「住」空間のクオリティーを向上させるような、静かなまちの活性化が期待できそうである。

続いて、立売堀にある富士ビルの一階、倉庫であったフロアがファブリック専門店として活用されるようになった。オフィスと倉庫仕様しか考えていなかったオーナーに、河合さんが「日常生活を彩る店舗を」と、生地の専門店「FIQ」を紹介したのがきっかけである。ターゲットは、若者というより生活者としてのファミリー層であることや、「pour annick」が既に出店していたことにより、オーナーの理解と協力を得たという。

生地の専門店「FIQ」

いずれも、目抜き通りから少し入った人通りのけっして多くない場所であるために、不動産コストも抑えられ、それが商品構成や価格にも反映される。立地上、急激にお客さんは増えないが、逆にこれらのお店を目当てにわざわざやってくる人にとっては、時間を忘れてゆっくりと楽しめるため、リピーターが増えているという。

その他、築三十七年の三階建ての小さなビルを、ギャラリーを兼ねた住まいに改装する橋渡しをされたり、ミネラルウォーターの製造プラントを備えた地域密着型宅配業の出店に関わられたりと、河合さんは、より魅力ある生活コンテンツが一つ一つ時間をかけて実現される手ごたえを感じておられるようだ。「オーナーさんとしても、結果として資産価値が上がることもあるので、喜んでいただいています」。「あとは、保育所と元気な高齢者のための施設があれば、もっと住みやすいまちになる。いずれ自分も家族とともにこのまちで暮らしたい」。

## 安田ビルのあたたかさ

河合さんのオフィスは、京町堀、靭公園から一筋北に建つ安田ビル内にある。現在三棟あるが、最も古い第一ビルは、昭和十一年に竣工。昭和二十九年に第二ビルが隣接して建てられ、昭和三十五年、筋向かいに第三ビルができている。

「安田社長は、いい意味で優しさと厳しさの両面をもつ方で、校長先生みたいです。私たちの目指すベンチャー的な仕事もご理解いただいて入居を許可くださり、賃料を手渡しでお支払いする際、励ましやアドバイスなどの言葉をかけてくださいます。社長さんとの出会いから、儲けることだけを優先しないもう一つの価値観をもつ資産家もいるのだということを体感し、必ずまちの中にも同じ感覚の方は存在すると確信しました」。

安田ビル 外観（第1ビル）

安田ビル代表取締役の安田清子さんは、現在八十六歳。部屋を借りたいという人は必ず自ら面接を行って、いい人であれば入ってもらうという。入居されている方々との交流も大事にされており、毎年テナントさん全員を招いて新年パーティーを行っているそうだ。また第三ビルの外壁の塗り替えについては、各テナントさんの意見を聞いた上で、その中の一人であるデザイナーさんに任せたという。塗装後、クリーム色の味わい深い外壁に、さらに安田ビルのファンが増えたようだ（著者が安田社長にお会いした後、第三ビルの美容室にヘアカットに行かれるとのことで、大家さんと店子のいい関係が育まれている一端がうかがえた）。そろそろ引退を考えておられるそうだが、その精神も社長業とともに息子さんに引き継がれるに違いない。

このまちも、安田ビルも、「あたたかく厳しく、人を育てる文化がある」という河合さんの言葉が印象的であった。

# 土佐・江戸・京町堀。町ぐるみプロジェクト

小山田 宗弘 氏

江戸堀で印刷物や企画デザイン制作などを行っている（株）創栄社の小山田宗弘氏が発起人・事務局となり、「土佐・江戸・京町堀。町ぐるみプロジェクト（通称・三堀（さんぼり）。町プロ）」が立ち上がったのは、二〇〇三年に入ってから。「このまちで、一九九〇年から制作会社をはじめた頃は、同じビルで働くいろいろなメンバーも元気があったが、景気のかげりを受け、多くの仲間がビルを出ることとなり、それがさみしくて、何か仕事以外でも一緒にできないかと考えた。このまちは、職場としての利便性だけではなく、掘り起こしたらいろいろなお宝があるので、面白いことができそうな気がした」。今は身近な個人でもできる「都会型町おこし」の企画を練っている。既に「三堀。Ｉｎｆｏ．」と題した地域情報誌の創刊準備号を発行し、新聞折り込みを中心に地域の人に確実に手渡せるよう進めているほか、商売繁盛「三堀。町プログッズ」として、千社札シールや昔のカワラ版の復刻版、新旧マップなどを作成し、まずは事務局本業の印刷物から充実させている。

「三堀。Info.」創刊準備号

再現した明治14年カワラ版

これからやっていきたいこととして、例えば、「土佐堀アート（ウオーキング）ストリート」と題して、土佐堀通り沿いにあるビルの空間を利用したアートによる装飾を、土佐堀沿いの企業やビルオーナーの方々に呼びかけたり、「一店舗・一ふるさとプロジェクト」として、そのお店が全国で一番好きな場所の料理や酒を提供して、三堀へ行けば、全国の良いものを味わえるという企画を、飲食店へなげかけたり、あるいは、中小零細企業にも、「三堀。町プロ」のための協力隊として、その得意分野のＰＲを盛り込んだ登録を募ったりして、準備に余念がない。現在、具体的には、創作ちょうちんコンテストを開催計画されており、秋頃に、肥後橋商店街に創作ちょうちんを飾ってコンテスト会場にし、終了後、全てのちょうちんをセリにかけ売るという。

現在主なメンバーは三十人くらいで、半分は地域の方、半分は勤めに来ている広告・建築設計関係の方だという。「マイペースで、楽しみながらやっていきたい」といわれる小山田さんは、既に「平野の町づくりを考える会」の方々とも交流を深め、ヒントを得ているという。三堀ならではの特性を生かした、今後の展開が期待できそうである。

## 時間滞留型のまちへ

西船場には公園が多い。中でも靭公園は、戦争直後に米軍が使用した航空飛行場の跡地利用というだけあって、広大な敷地に豊かな緑、四季の花に噴水と、まさに都会のオアシスであり、この地域を上質の住空間に仕立てている。

最近、周辺に大人がくつろげるお店があちこちにできてきた。無添加の天然酵母にこだわるパン屋やヘルシーメニューのダイニング、アンティーク家具やペット雑貨店、植物スタイリストのお店など、地元を中心とした人々の日々の営みを楽しく演出してくれそうなところばかりである。

あちこちに数多く点在する近代建築は（今回は紹介しきれなかったが）まちの背景にもなり、中でもオーナーや店主の特別な思いを実現させる形で改装されたものについては、地域の人はもちろん外部の人も、

靭公園

日本基督教団大阪教会（大正11年竣工）
ヴォーリズ建築事務所によって設計された傑作である

建物に実際入ることでその趣とともに新しい「場」の今日的意味合いを感じることができるだろう。また、生活スタイルをお洒落に提案してくれる、上等な家具やファブリックを扱うお店、ちょっと贅沢して出向きたくなるようなカフェレストランなど、時間滞留型ビジネスを誘導するコンテンツが、旧来の物件と場所性を生かすことによって、確実に生まれ、根付いている。「他の人には教えたくない」と思わせる隠れ家的な魅力も備え、遠方からわざわざやって来る客も増えている。住民同士、足元を見直す動きも立ち上がりはじめた。

長瀬産業
昭和3年竣工の旧館の風格が新館にも見事に反映されている。

住みたくなるまちづくり、訪れた人が時間を忘れて楽しめる「場」づくりが、住民の視点で、さらに展開されていくに違いない。プライベートでも何度も足を運びたいまちである。

靭公園の緑を眺めながら楽しめるカフェ（写真：上、下）

（大阪ガス エネルギー・文化研究所 研究員）

## 主な参考文献


『近代建築ガイドブック関西編』 鹿島出版会 昭和五九年
『西区史』 西区史刊行委員会 清文堂出版株式会社 昭和五四年
『モダンシティふたたび』 海野弘 創元社 昭和六二年
『京町堀慕情』 京盛会復興三〇周年記念誌 京盛会（発行） 昭和五六年
「江戸堀コダマビルの栞」 江戸堀コダマビル発行 平成一五年
「モダン都市大阪 近代の中之島・船場」 住まいのミュージアム 平成一四年
「大阪人」VOL56、VOL57 平成一四年
他